

MUSEUM EYES

ミュージアム・アイズ

Vol. **77**

あの人も、この人も



利光 鶴松

1864 (文久3) — 1945 (昭和20)

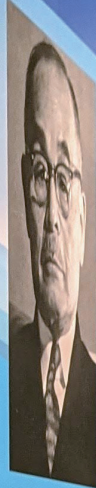
明治法律学校中退 (のち推薦校友)。在学中代言人 (弁護士) 試験合格。東京市会議員、衆議院議員をへて実業界に転身し、鬼怒川水力電気を創業し社長就任。その後東京市街鉄道、帝都電鉄 (京王電鉄井の頭線) 等の創設に関わる。1923年には小田原急行鉄道 (現小田急電鉄株式会社) を創設し社長に就任。



尾佐竹 猛

1880 (明治13) — 1946 (昭和21)

1899 (明治32) 年明治法律学校中退、1901 (明治34) 年東京大学法学部、明治大学教授、同大文学部文科 (現在の文学部) の設立に関与。創設部長となった。法曹として活躍するも、1938 (昭和13) 年、東京大学文学部教授として「尾佐竹」...



長谷川 太郎

1881 (明治14) — 1960 (昭和35)



金 剛

1897 (明治30) — 1941 (昭和16)



水野 英太郎

1891 (明治24) — 1941 (昭和16)



栗原 白郎

1891 (明治24) — 1941 (昭和16)

特集

校友山脈

— 明治大学の教育と人材 —

このたび、明治大学に学び、各界で活躍する代表的な卒業生（校友）の紹介を主題とする、特別展を開催しました。

校友とは卒業生を中心とする大学関係者を意味する言葉です。この呼称は日本ではじめて明治大学が使用したといわれ、現在国立・私立問わず多くの大学で用いられています。明治大学は1881（明治14）年の創立以来、58万人超の校友を送り出しています。展示タイトルの「校友山脈」とは、明治大学の輩出した校友の重畳・連なりを「山脈」にたとえたものです。残念ながら顕著な功績を残した数多の校友すべてをご紹介することはできませんが、展示では〈古今東西の校友群像〉の一端をご紹介します。

校友山脈ウォールと資料展示

展示室中央の横幅11メートル近くわたって「校友山脈ウォール」を設置しました。140年の歴史のなかで、明治大学が輩出した校友のなから100名あまりをウォールいっぱいに掲示しています。

校友は、①法曹、②政界・財界、③文化・芸術、④スポーツの4分野から、生年順に掲示しています。今回掲示した校友は、もともと生年が早い利光鶴松氏（小田急電鉄創業者 1863年生まれ）から最年少の児玉雨子氏（作詞家）まで生年でおおよそ130年の隔りがあります。

そのほか、4分野の校友関連資料を展示しています。「こ存じ！明大時代小説家の系譜」と題したコーナー展示では、時代小説家として活躍した4名の作家（子母澤寛・佐々木味津三・富田常雄・五味康祐）にまつわる資料を展示しました。

多分野に広がる明治大学の圧倒的な「校友山脈」の連なりを体感していただければと思います。

校友山脈インタビュー映像

運動企画として、今回は校友へのインタビュー映像も企画制作しました。「校友山脈 明治大学140→150周年 150人の卒業生たち（150→10150）（守屋健太郎監督）」と題した映像では現在各界の第線で活躍する校友10名へのインタビューを行っています。学生時代の学び・経験が実社会で役立つこと、あなたにとって明治大学とは、などを語っていただきました。展示室ブースで上映するほか、明治大学公式YouTubeチャンネルでも公開します（<https://www.youtube.com/user/meijibid>）。特設サイトからリンクできます。ぜひご覧ください。

明治大学の教育

校友たちが学んだ明治大学の教育は、現在どのような段階に至っているのでしょうか。明治大学10学部（法学部・商学部・川

ミニケーション学部・国際日本学部・総合数理学部）関連資料や、教育方針、求める学生像、そして卒業後の進路などをパネルでご紹介しています。今回展示でご紹介した校友は、巨大な校友山脈のごく一角に過ぎません。来館者各位のご意見を頂戴しながら、今後も継続的に本企画を続け、巨大な山脈の全容に迫りたいと思います。（大学史資料センター 村松玄太）



校友紹介ピクトグラム



中退（のち推薦校友）。在学中代官人（弁護士）試験合格。衆議院議員を経て実業界に転身。その後東京市議員。1923年には小



ご存じ！明大時代小説家の系譜

学生広報アンバサダーが見た！

校友山脈の見どころ紹介

今回の特別展で心惹かれたものは菊池寛が佐々木味津三に宛てた追悼文です。展示のパネルにはありませんが、菊池寛もかつて明治大学に在籍していました。明治大学を志し、入学した学生ならもちろん知っているのでしょうか、菊池寛と言えば芥川賞・直木賞をつくり、文藝春秋を創刊した人です。彼によって見出された作家は数多く、佐々木味津三もまたその一人だったことがこの原稿からうかがえます。このように、今回の展示では「実物」を見ることができません。箱根駅伝のたすきや直筆の色紙、往年の卒業アルバムなど、どれもきつと訪れた人の心によさしく明治大学の「同心協力」の精神を伝えてくれることでしょう。

博物館学生広報アンバサダー S・A（情報ミニケーション学部2年）

校友山脈インタビュー映像

校友会長である北野大さんのインタビューを拝見しました。明治大学の昔と今を心から愛している方だと感じました。私自身校友会の存在は知っていましたが、具体的にどんな活動がなされているかは知りませんでした。しかし、今回のインタビューで、第11代学長である岡野加穂留先生の「方言の聴こえるキャンパスにしたい」という思いを北野さんが受け継ぎ、校友会の奨学金制度を始めとする活動をされているのだと分かりました。インタビュー企画のトップバッターとしてふさわしい方だと思います。

博物館学生広報アンバサダー S・Y（商学部1年）



会期 2021年7月31日(土)～11月3日(祝・水)
※開館日・開館時間については博物館特設サイト等
<https://www.meiji.ac.jp/museum/exhibition/koyusamyaku.html>よりご確認ください。



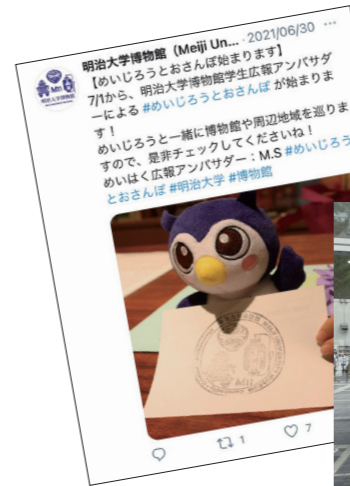
展示入口

表紙写真は校友山脈ウォール

学生広報 アンバサダーの活動

学生同士が交流を深め、充実した学生生活を送れるよう支援するプログラムとして、今年度、学生広報アンバサダーを募集しました。21名が4チームに分かれて活動を開始。若い世代に博物館をアピールするための様々なイベント企画や広報ツールを考案しました。

博物館の見所や駿河台キャンパス周辺のスポットを大学SNS「めいじろ」が案内するSNSによる情報発信が始まっています。開催中の特別展「校友山脈」を広報するため和泉キャンパスで「めいじろ」とともにチラシを配布、大勢の在学生が注目してくれました。特別展に関し、学生向け学内ポータルサイトを媒体とする宣伝文を考案したチームの成果は、在学生が大学に戻ってくる



新型コロナウイルス 感染症への対応

4月25日の3回目の緊急事態宣言発出に際しては東京都から床面積1000㎡以上の博物館・美術館に休館要請がなされた関係で、一般公開を再び休止せざるを得ませんでした。宣言解除後、6月21日から一般公開を再開し、企画展「絵図が語

る内藤藩の歴史」は会期の残り半分、一般の方々にもご覧いただくことができました。7月12日の4回目の緊急事態宣言発出後は、十分な感染防止対策を取り得るという判断から、公開を継続しています。

南山大学協定通信 明治大学・南山大学収蔵資料オンライン交換展示を開催します

明治大学博物館と南山大学人類学博物館は、2010年より交流協定を結び、相互の収蔵資料の交換展示などの共同事業を行っています。2021年度は、新型コロナウイルス感染症の影響によりオンライン上で交換展示を開催します。

【期間】 9月30日(木)～11月8日(月)
【公開場所】 各館のホームページで公開します。
明治大学博物館ホームページ
<https://www.meiji.ac.jp/museum/index.html>
南山大学人類学博物館ホームページ
<https://rci.nanzan-u.ac.jp/museum/>



人面 (パプアニューギニア)

南山大学人類学博物館
「民族誌資料に見るタカラガイの利用のかたち」
南山大学人類学博物館の資料から
今回はパプアニューギニア、アフリカ、中国などの民族誌資料を紹介いたします。共通点は「タカラガイ」です。タカラガイを加工したもの、タカラガイで装飾したものなど、「素材としてのタカラガイ」に注目しました。



講談一度読切 丸橋忠弥

明治大学博物館
「錦絵に描かれた捕者道具」
明治大学博物館刑事部門では、犯人捕縛に使用した捕者道具やその関連資料を収蔵しています。今回の展示では、関連資料の中から錦絵を取り上げ、錦絵に描かれた捕者道具の姿を紹介いたします。

オンラインコンテンツの充実

企画展「因・伯・雲のやきもの—山陰の手仕事から」の動画公開

新型コロナウイルス感染拡大にともなう臨時休館を契機に、ホームページから閲覧できるオンラインコンテンツの充実化を図っています。

企画展「因・伯・雲のやきもの—山陰の手仕事から」についても、会期が4月26日からの一般公開休止時期にまるまる重なってしまったことから、オンラインコンテンツを制作することにしました。展示会の雰囲気味わっていただけるよう、会場の様子を撮影した動画にテロップを付したコンテンツとしました。

このコンテンツは、全国各地の博物館が発信するプログラム「おうちミュージアム」の活動の一環として、明治大学博物館のホームページ内において公開されています。



吉田がデザインした染分けの皿。
半農半陶業の産地のどこにでもある種類の釉薬だが、
組み合わせ方が絶妙だった。鳥取民藝のアイコンである。

牛ノ戸焼 染分け皿
鳥取県鳥取市
牛ノ戸焼堂元
1965年収集



アクセスして
オンラインコンテンツを
楽しもう！

明治大学博物館×おうちミュージアム

上記リンクよりご覧いただけます。
2020年秋以降に公開した収蔵品解説：
商品 「漆器」①～③(動画)
刑事 「江戸の物価と世直し一揆」(静止画) / 「図解五拾五ヶ條」
「捕者道具 他」 / 「印章の話」 / 「高札」①②(以上、動画)



おうちミュージアムとは？

子どもたちが自宅で楽しく学ぶことができるアイデアをオンラインで提供する取り組みとして、北海道博物館の呼びかけによりスタートしました。現在では全国各地の博物館・美術館がその取り組みに参加しています。明治大学博物館でも、収蔵品の紹介・解説などを中心に随時コンテンツを配信しています。

おうちで
博物館を
楽しもう！

江戸時代における 絵図の管理

日比 佳代子(刑事部門学芸員 日本近世史)

内藤家文書の中には岩城平領時代、延岡領時代などの絵図が含まれている。これらの一部については明

治大学博物館ONLINEミュージアムで公開されており、直近では2021年6月10日から7月7日まで開催した「絵図が語る内藤藩の歴史」展で展示公開を行った。本稿では、絵図が当時の人たちにとってどのような意味をもつものだったのか、絵図の管理という側面から検討してみたい。

①については、天保の国絵図作成時の絵図の利用状況に注目しよう。天保の国絵図は、天保6(1835)年に国絵図作成の命令がくだされ、同9年に完成した。内藤家文書の中の天保8年の大目付の記録には、「御国絵図御用」のために「御絵図」が調べられたことが記されている。以下、関連記事を示す(注1)。

まず1月13日の記録には次のような記事がある。

- ① 御国絵図御入用二付、御朱印御長持開封仕候二付、御納戸掛合次第登 城可仕旨御用番申間候
 - ② 右同断二付当役兔毛、御納戸役山田源吾、白土與七郎、御土蔵方樋口次郎八、登
- 城仕、御廣間当番末永小兵衛、濱沢乙次郎より御

番の管理下にあること、長持ちを開封する際には大目付、納戸役、土蔵方が立ち合つたこと、その際には広間番から長持ちを受け取つて唐の間へ移動し、唐の間で開封すること、中身を取り出して閉めたら大目付と納戸役が合封印を、土蔵方が上封印をして広間番に返すこと、出したものを戻す際にも同じ手続きを行うこと、などが分かる。②と③の二書の最後には、「諸事前々之通無滞相済申候」とあるので、このような長持ちの管理は「前々」からずっと行われているのである。大目付は監察的立場から「御朱印御長持」の立ち合いを行い、そのために、大目付の記録に絵図のことが出てきていたことが理解できる。

ちなみに、絵図ではなく「御朱印」を長持ちから出す際も同様のことがおこなわれている。上記に引用したのと同じ大目付の記録の中に、前年12月の「御朱印御寒干」と6月の「御朱印御虫干」に関する記録があり、この時も大目付と納戸役と土蔵方が登城して、広間番から長持ちを受け取つて同じ手続きで開封・封印をしている。

ではこの「御朱印御長持」にはどのような絵図が入っていたのだろうか。それを示すのが「御広間御長持入日記」である(注3)。この史料は、広間に置かれた長持ちの中身を示したもので、幕府から与えられた所領安堵の朱印状や領知目録を始め、官位に関わる口宣書や宣言、位記、内藤家の系図、秀忠や家康から与えられた黒印状、郷村高辻帳、絵図などが書き上げられている。絵図に関しては新規に入れたり、管理場所を土蔵に移したりといった情報加筆されており、他のものより出入りがある。天保8年段階では「日向国延岡高千穂絵図 吉杖」、「豊後遠見郡村絵図 吉杖」、「日向国宮崎郡太田組村絵図 吉杖」、「豊後国境目村山絵図 吉杖箱入」、「日向国宮崎郡村飯絵図 吉杖」の5口がひと箱に入られ、長持ちに納められていた。なお、これらの絵図の書き上げ部分には、付箋が貼られており、付箋には「御引渡之豊後国絵図 吉杖」、「日向国山陰村之内寺廻門絵図 吉杖」

長持受取、於唐之間開封之上、右御絵図御用相済、当役兔毛、御納戸役白土與七郎合封印仕、上封印者御土蔵方樋口次郎八仕、御廣間当番右両人江引渡、諸事前々之通無滞相済申候

①の二書には、国絵図の御用のため、「御朱印御長持」を開封する事になったので、御納戸から声がかかったら登城するように大目付に指示があったとある。登城してからの様子は②の二書に詳しく記されている。この件で、当役兔毛(大目付の大嶋兔毛)、納戸役の山田と白土、土蔵方の樋口が登城し、広間番の末松と濱沢から長持ちを受け取り、唐の間でこれを開封した。絵図を長持ちから取り出す御用が終わったので、長持ちを閉めて、大目付大嶋と納戸役の白土が合封印をおこない、さらに土蔵方の樋口が上封印をし、広間番の二人に長持ちを引き渡した、とある。

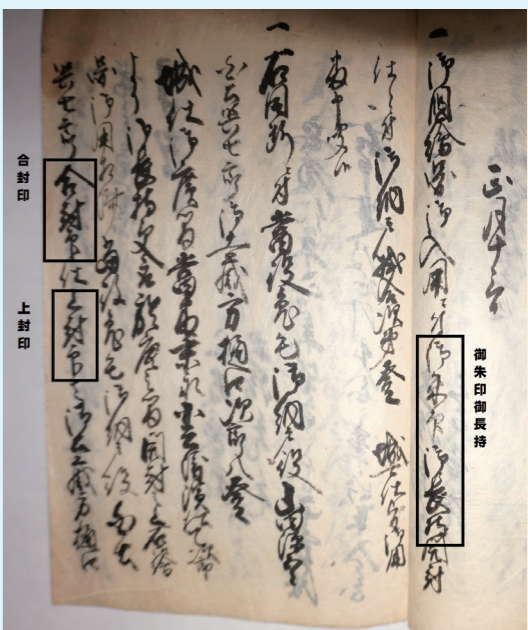
続いて、1月16日の記録には次のような記事がある。

- ③ 御国絵図御用相済、御朱印御長持江相納申候二付、当役兔毛、御納戸役山田源吾、白土與七郎、御土蔵方樋口次郎八、登
- 城仕、御廣間当番大嶋武造、猪狩汀より御長持請

杖、「宮崎郡絵図 吉杖」が、「入記之外」として書き上げられている。「御広間御長持入日記」の本文の書き上げには含まれていないが、実際にはこの3点の絵図も長持ちに入れられていたという事になる(注4)。

「御広間御長持入日記」に書き上げられた朱印状や領知目録などは、内藤家の所領支配の根幹に関わるものであり、他の藩の行政的な記録などとは意味合いが異なる。だからこそ、城の広間に別置され厳格に管理されていたのである。絵図の内容に関するさらなる検討が必要ではあるが、上記8点の絵図は、その名称から内藤家の所領や領境を示すものであることが窺え、そこに「御広間御長持入日記」に書き上げられた他の記録類と共通する性格を見いだすことができる。これら8点の絵図もまた、内藤家の所領支配の根幹に関わる記録として大広間の長持ちで保管されていたのであろう。その管理のあり方からは、当時の人々にとって絵図が単なる地理的な情報以上の意味を持っていたことが窺えるのである。

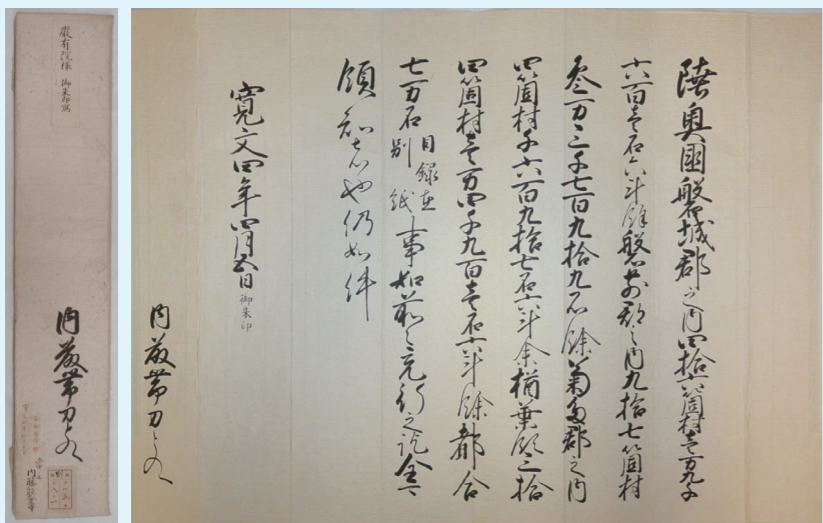
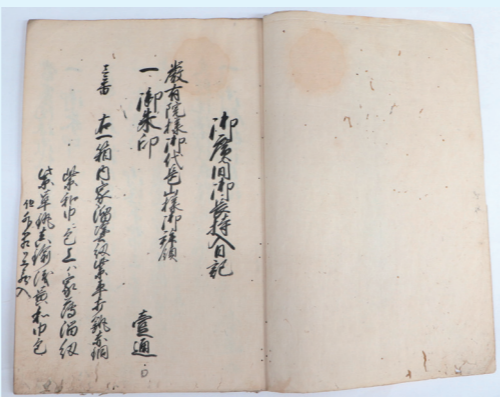
「江戸延岡来状留」
1月13日条



受、於唐之間開封之上、右御絵図相納、当役兔毛、御納戸役白土與七郎合封印仕、上封印御者御土蔵方樋口次郎八仕、大廣間当番右両人江引渡、諸事前々之通無滞相済申候

すなわち、国絵図の御用がすんだので、「御朱印御長持」への収納のために、大目付大嶋と、納戸役の山田と白土、土蔵方の樋口が登城した。広間番の大嶋と猪狩から長持ちをつけとり、唐の間で長持ちを開封し、絵図を納め、(長持ちのふたをして)大目付大嶋と納戸役の白土が合封印をおこない、さらに土蔵方の樋口が上封印をし、広間番の二人に長持ちを引き渡した、とある。

この記事から、城の広間に置かれた「御朱印御長持」の中に絵図が納められており、この長持ちは厳格に管理されていることが分かる(注2)。13日の記事は、絵図を取り出すための長持ちの開封・封印に大目付が立ち合った際の記録、16日の記事は絵図を戻すための長持ちの開封・封印に大目付が立ち合った際の記録である。記事からは、通常長持ちは広間



右 | 「御広間御長持入日記」。「嚴有院様御代長山様御拝領 一、御朱印 壹通」とある。嚴有院は徳川家綱、長山は内藤忠興(帯刀)のこと。
中 | 広間の長持ちで管理されていたと考えられる所領安堵の朱印状(写真はその写)「嚴有院様御朱印写」(『内藤家文書』3-23-3-1)。
左 | 朱印状を包んでいた包紙、「嚴有院様 御朱印写」の付札がある。



ノスタルジーからクールジャパンへ

2010年代における伝統的工芸品に対する評価の変化

外山 徹 (商品部門学芸員 地域文化論・博物館学)

個人的な事情からはじめるが、2004年にアカデミーモンの新博物館が開館してからは、伝統的工芸品の産地調査に出向けなかった時期があった。産業の現場へ再び通い始めるのは2011年の夏からだ。その間、断片的な情報には接していたものの、足かけ8年あまりのブランクを経て、伝統的工芸品に対する評価が様変わりしていったのは、正直、驚きであった。

1. 驚くべき「変化」の到来

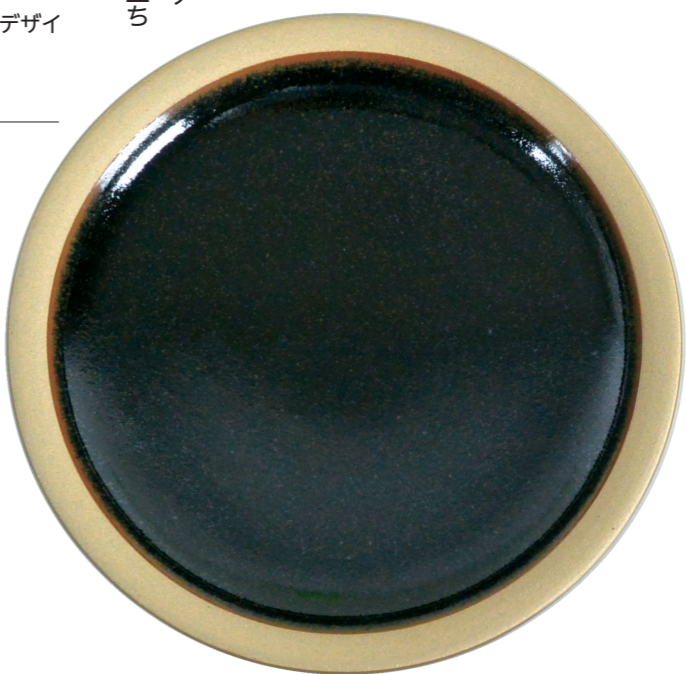
調査再開後に訪ねた有田焼(佐賀県)、備前焼(岡山県)において印象的だったのは、有名企業のロゴやヒット商品を手がけたデザイナーが商品開発に参画していることだった。これは、昔のよいものを写すという、それまでの伝統工芸にあったデザイン手法と線を画する動向であるが、とかく閉鎖的な空間であった伝統工芸の産地に風穴が空いた印象だった。こうしたデザイナーが、山里の古びた工房で職人がこつこつ作る素朴な器というイメージを打ち出すはずがない。それは、一見、伝統工芸のイメージとは全く別次元の商品に思えた。

山陰の調査過程で、手づくりの陶器が30代、40代という世代に注目され、年配者はあまり見かけない、という



備前焼の備煎シリーズ「イルカ」はプロダクトデザイナーとのタイアップ商品

顧客動向を聞いた時は夢でも見ている気がした。これには、アパレルのBEAMSが立ち上げたfennicaという雑貨シリーズの柳宗理[※]ディレクションが少なからぬ影響を与えたようだ。すでに2000年前後の調査においても、器を使う空間全体のトータルコーディネートという視点から、売り込む先は食器業界ではなく、これからは高級雑貨のセレクトショップだと聞いていたが、その動向がいよいよ眼前に立ち



fennicaシリーズの柳宗理ディレクション(出西窯・島根県)

現れたのであった。

これには「スタイル」というものへの使い手の注目とSNSによる発信という文化が関わっている。すなわち、自分が作った料理をフェイスブックやツイッターで発信するなど、自らのこだわりのライフスタイルを積極的に他者に伝えてゆきたいという動向である。このことにより、工芸品は「過性の消耗品」ではなく、使い手のライフスタイルを構成するアイテムとして価値を求められる商品となった。そして、使い手は工芸品のConsumer

からOwnerへと変化した。作り手もまた、SNSというツールを手に入れ、自らの情報を発信するようになった。そこでは、モノに関する情報からモノが成立する連の循環に関わる情報へと、発信内容に変化が見られる。つまり、産地の自然環境であるとか、土地の産物、作り手の生活実践、商品の使用例などである。そして、作り手は注文通りに作業をこなす職人から、自らの哲学によって作品を生み出すArtistとなった。伝統工芸への美術的付加価値はしばらく前から言われていたが、それは、モノの姿・形ばかりではなく、作り手の人としての表現活動にこそ存在するようになった。

2. 高い品質への国際的評価

広島県熊野町の化粧筆は2011年のW杯に優勝した女子サッカー日本代表チームに対する国民栄誉賞の

comfort of use. The techniques that were cultivated in making the traditional brush have been put to the best use in the production of make-up brushes.



日本が誇るスーパー工芸品 広島県熊野町の化粧筆

副賞となったことから躍注目されたが、その以前から高い品質によって世界の一流メイクアップアーティストが認めるものだった。加工技術もさることながら、素材の吟味が重要な要素で、これは書筆(熊野筆)の伝統が土台にあつてのことだろう。世界的に有名な刃物メーカーであるヘンケルス(独)が技術提携のため岐阜県関市(関打刃物)に生産拠点を設けたこともニュースになったし、同社が所在する刃物の産地ゾーリングのメーカーが越前打刃物(福井県)を採用するなど、和包丁の切れ味に対する評価も高い。また、和紙は画仙紙や写真作品のプリント用紙として海外のアーティストから注目されている。通常の印画紙と違って、和紙はインクが繊維に沈み込む仕組みだが、因州和紙(鳥取県)を用いた写真展の作品には、特大の写真の引き込まれるような奥行き感に驚いた。

これらは、グローバルな人とモノとの交流によって、日本の伝統工芸の技術を土台に従来とは異なる新たな発想が取り入れられ、結果、高い評価を得た事例ということになる。明治維新以来、欧米の後ろ姿を追い続け、本家を凌駕する技術革新を成し遂げたが、バブル崩壊後、一転、停滞局面に陥った。ところが、海外にアピールすべき先端技術が、実は古くからの日本の伝統の中に存在したのである。

3. 「クールジャパン」の発信

こうした状況を踏まえて、行政の側も積極的な動きを見せるようになった。

経済産業省は、各地の物産や景勝地までをセレクトしてアピールするThe Wonder 500を2015年に発表し、海外に対する日本産品のPR事業を開始するが、そ

の中には伝統的工芸品が多数含まれていた。東京都もまた、「東京きさらしプロジェクト」を2016年に発足、モデル事業の募集と支援、プロモーション活動を開始した。これらの特徴は、伝統工芸をノスタルジーとして表現するのではなく、スタイリッシュなものとして、日本の伝統技術を内在しつつも、むしろデザイナー上は無国籍なイメージが発信されている点にある。

民間においても、日本で最もステータスの高い商業地区の象徴的な施設としてGINZA SIXが2017年にオープンするが、漆器や燕鋳起銅器のテナントが入り海外ブランドの向こうを張っている。これらの動向は東京五輪の開催を数年後に控え、インバウンドの増加を意識したものであったろう。1度目の東京五輪では経済躍進により先進国の仲間入りを果たした姿をアピールし、2度目は長い歴史と成熟した文化を持つ国をアピールする機会だったはずだが、残念ながらその目算は外れることになった。とは言え、クールジャパンを世界に発信する動向はこれからも途切れることはないだろう。

しかしながら、冷静に見なければならぬのは、これらの商品は国民の誰もが手にするような日用品ではないということである。近代工業化の帰結として、手作りの文化は、前近代におけるような最低限の実用性という普及品ではあり得なくなったのである。したがって、産地の規模は縮小し、握りの勝ち組が生き残っている状況には違いない。だからと言って、贅沢品として敬遠するばかりではない。誰しもが豊かさを享受できる時代が到来すれば、伝統的工芸品産業は発展を続けられるだろう。

※工業デザイナー。手作りの工芸を称揚した民藝運動のリーダー柳宗理の息子。家具やキッチンアイテムのデザインが世界的な評価を受ける。

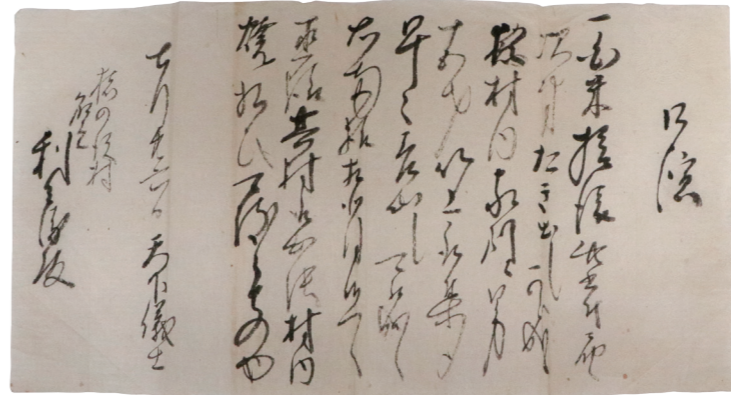
幕末期の浪人・無宿人たち

勝見知世

写真①の古文書は、明治大学博物館に収蔵されている資料の一つである。この資料には「炊き出しと人足を差し出せ、背けば村を焼き払う」と名主たちを脅す言葉が書かれている。実際、要求に従わなかった名主は屋敷を焼き払われるなどの被害を受けた。差出人は「天下義士」。この天下義士とは一体何者なのだろうか？



写真②：伝関東取締出役鉄製銀流し十手(名和コレクション54)



写真①：「口演写」(山口村文書20-状-S-227)

この騒動で浪人や無宿人たちが天下義士を名乗った。浪人と聞くと、主人のいない武士を想像するかもしれない。しかし、幕末の浪人は武装化したならず者を指す場合があった。写真①を書いた浪人もそのならず者たちである。彼らは、不満を抱えた農民たちの指導者となって騒動を起こし、裕福な商家や名主を襲い略奪行為などを行った。

この騒動が起こる前の18世紀後半から、浪人や無宿人が村へ金銭の要求などを行うことが問題となっていた。幕府は対応に追われ、取り締まりを行う。文化2年(1805)に設置された関東取締出役もその一環である。

彼らは水戸藩領を除く関八州(上野・下野・常陸・上総・下総・安房・武蔵・相模)で博奕の横行や風俗などの取り締まりをした。写真②は関東取締出役の十手と伝わっている。十手は犯人捕縛時に刀を受け止めたり、刀を持つ腕を叩いたりする道具である。その素材や形態の違いなどから、自身の身分を表すものでもあった。

また、浪人や無宿人たちは、特有のいでたちをしていた。そのいでの一つが長脇差を持つことである。幕府は長脇差の所持を何度も取り締まっている。写真③の高札は無宿長脇差取締について書いたもの。文政9年(1826)に出されたもので、「無宿は長脇差や鑓、鉄砲を持って歩き、狼藉に及んでいる。それを百姓たちも真似している。」と持っているだけで罪の有無関係なしに死罪や重罪にする」と武器の所持を禁止した。

写真③の高札からわかるように、幕末には治安が悪化し、百姓までもが浪人や無宿人のように武装していく世の中になった。その結果、写真①にあげたような騒動が起こった際に、武器を用いた破壊活動が行われることもあった。今回取り上げた資料で、幕末の混沌とした情勢を確認することができる。

参考文献

- 府中市郷土の森博物館 2011年「府中市郷土の森博物館ブックレット14 アウトローたちの江戸時代～19世紀の府中の世相～」
- 青木美智男 2004年「近世非領国地域の民衆運動と郡中議定」ゆまに書房
- 国立歴史民俗博物館 2004年「民衆文化とつづられたヒーローたち アウトローの幕末維新史」



写真③：無宿長脇差取締の高札(高札50)

トロツエツラー 古代南イタリアの壺

川嶋陶子

日 本列島において稲作が普及してきた紀元前8世紀～4世紀頃、遠く離れたヨーロッパ大陸では、ギリシアのアテネを中心とした文明が栄えていた。地中海沿岸にポリスと呼ばれる小規模な都市国家がいくつも起こり、海上交易・貨幣経済の発達、民主政治の出現、哲学・芸術活動の隆盛など、後の西洋文明の源流となる社会が形成されていたのである。同時期の古代イタリアにおいては、南端部やシチリア島にマグ

植民市が作られていたが、その他の地域については言語や文化の異なる民族が各地に定住しており、政治的にも統一された社会ではなかった。イタリア東端部のサレント半島においては、紀元前7世紀頃からダウニア、ペウケティア、メッサピアと呼ばれる勢力が存在していたが、彼らはアドリア海対岸のバルカン半島西部から渡ってきた人々だと考えられており、その文化もギリシアやローマなどの地域とは異なるものであった。

今回紹介する収蔵品は、トロツエツラー(Trozzella)と呼ばれる壺で、メッサピア文化の陶器である。一番目を引くのは、肩から突き出すような取っ手とそ



トロツエツラー

れに取り付けられた円形の装飾である。ロープとこの滑車のような造形で、円形部分にはスポークのような線画が描かれているのも興味深い。表面を見ても、口縁部の内側にも彩色が施されており、取っ手の部分には直線や波線が表されている。首の部分に描かれる文様は直線や波線の他、一番広い文様帯には菱形の形をした網目状の文様が描かれている。メッサピア文化は紀元前8～7世紀頃に出現し土着の文化として栄えたが、前4世紀以降になるとギリシアやヘレニズム文化の影響を強く受けるようになり、雷文や動植物文などの複雑な文様が入り入れられた結果、次第に独自性を失っていくことになる。

また、このトロツエツラーという壺は、墓の副葬品としてのみ出土することから、葬送儀礼に関係する器であると考えられている。特に興味深いのが、身分の高い女性の墓に限られて副葬されている点で、クラテール(混酒器)や武器などを副葬する男性の墓からは出土しない。メッサピア文化を特徴づける器のひとつであり、ギリシア周辺文化の二形態として、また古代ローマ台頭前におけるイタリアの多様性を反映するものとして大変興味深い資料であるといえよう。



南イタリアおよび周辺地図

主要参考文献

- 北原敦 2008「イタリアと都市ローマ」『イタリア史』山川出版社
- Maria Teresa Giannotta, Valeria Melissano (2010). Forma, tipo e produzione: primi risultati dallo studio delle trozzelle di Manduria. *Il dialogo dei Saperi-Metodologie integrate per i Beni Culturali*, 2010, Edizioni Scientifiche Italiane, pp.291-310.
- D'Andria Francesco (1990). *Archeologia dei Messapi*. Editoria di Puglia.

M2 カタログ

明治大学の伝統ある校歌が クリアファイルに!

「白雲なびく……」にはじまる明治大学校歌(児玉花外作詞 山田耕筰作曲)は、1920(大正9)年に制定されました。この校歌は学生自らの手により完成した珍しい成立過程を有していることで知られます。校歌制定から100年が経過したことを記念し、明治大学で所蔵する山田耕筰校歌自筆譜面(1920年)の影印と歌詞を掲げたダブルポケットクリアファイルを制作しました。現在歌われていない初演時の「幻」の歌詞がみられるのも注目です。初演時の歌唱を再現した映像へのQRコード付き。



明治大学校歌(山田耕筰自筆譜)両ポケットクリアファイル(税込価格150円)

ミュージアムショップ開室時間

月～金 10:00～16:30 土 10:00～12:30
 ※日曜日・祝日・大学が定める休日および夏季・冬季休業は閉室
 ※販売品・価格・開室時間は変更する場合があります

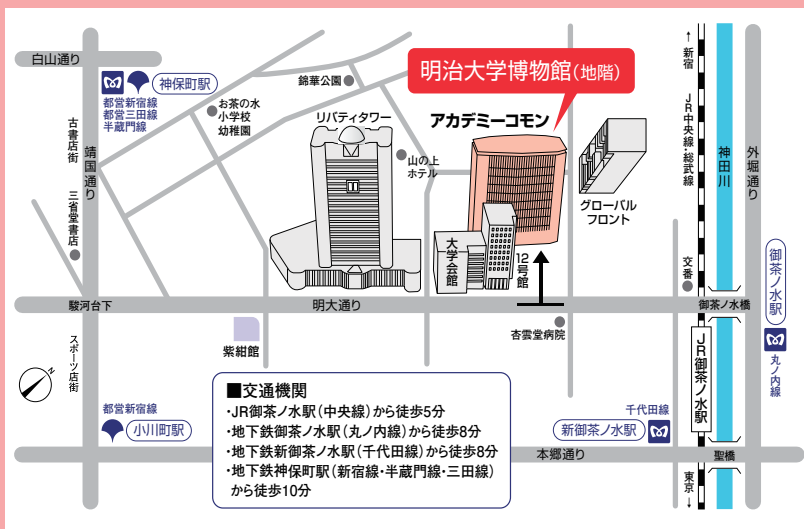
来館案内

展示室ご利用案内

- ◆開室時間
平日 10:00～17:00(入館16:30まで)
土曜 10:00～12:30
- ◆休館日
夏季休業(2021年8月10日～16日)
冬季休業(2021年12月26日～2022年1月7日)
- ◆観覧料
常設展無料
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- 現在新型コロナウイルス感染症感染防止対策のため、オンラインによる事前予約制を導入しています。詳細は博物館ホームページをご覧ください。
- ご利用は蔵書の閲覧・コピーのみとなります。



現在新型コロナウイルス感染症感染防止対策のため、展示室・図書室・ミュージアムショップの開室日時については変更・臨時閉室する場合がありますので、博物館ホームページで確認してください。

